

II בְּרֵאשִׁית



創世記 2 章

10-14 節

ベレーシート
בְּרֵאשִׁית 創世記 2 章

その地の金は良質で、そこには
ベドラハとショハム石もあった。

(創世記 2 章 12 節)

昔からあるエデンの様子を

霊の中で学びます。



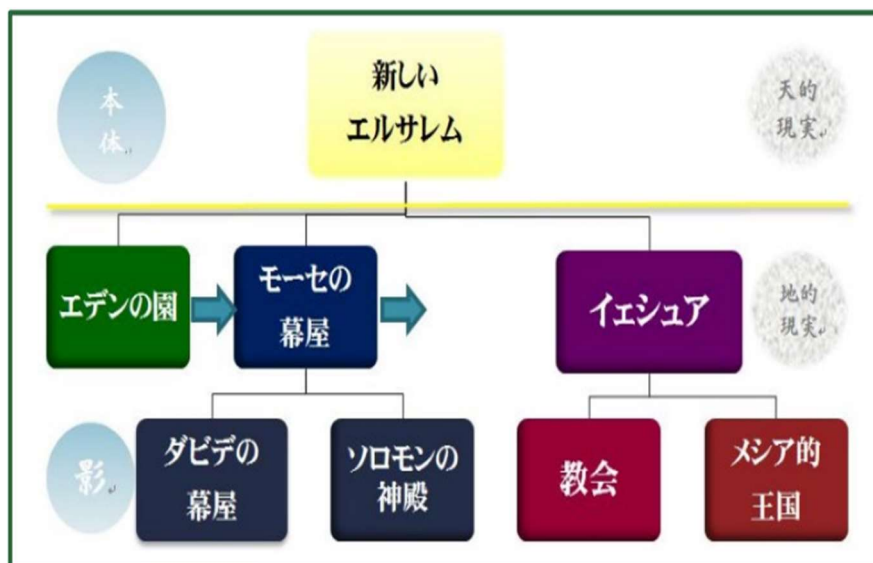
この学びは「新改訳 2017」を基本としています。

前回の補填

「安息の家」であったエデンの園は、本体の「写し」に過ぎません。

本体である「新しいエルサレム」は、完成されて「天」にあります。

神の台本は、すでに出来上がっているのです。



そのシナリオが歴史に反映されて展開しています。

「エデンの園」から始まり「モーセの幕屋」👉「ソロモンの神殿」👉

「イエシュア」👉「教会」となって、

「メシア的王国」が到来しますが、これも「写しと影」です。

「メシア王国」の千年間が終わると、神の幕屋の本体である

「新しいエルサレム」が天から地上に降りてきます。

前回は、エデンの園に「見るからに好ましく、食べるのに良いすべて

の木」を生えさせた（創2：9）話でした。

本日は、10節に入ります。

創世記 2 章 10 節

一つの川がエデンから湧き出て^{ヤーツアー} **נַחַל**、園を潤していた^{シャーカー} **שָׂרַף**。

それは園から分かれて、四つの源流となっていた。

木は tree,川は river のイメージですが、

「エデンの園」では、人が食べたり飲んだりするための

「木」であり「川」なのです。

人に飲ませるための「いのちの流れ」が

「川」となって湧き出て、園の全体を潤しているということです。

「いのちの木」は「神のことば」、

「いのちの水の川」は「聖霊」を表します。ですから、

「神のことば」と「霊」が

「エデンの園」でミングリングしている状態です。

創世記 1 章 2 節では、地が水の中に埋没して「水」はあっても

「 霊 」は「 水 」の上をホバリングしていて、
ミングリングしていませんでした。

「 神のことば 」と「 霊 」を一つにするのが「 血 」です。

「 血 」によって、「 神のことば 」と「 霊 」がつながり
ミングリング出来るのです。

これは、神の御計画に含まれています。

創世記 1 章 3 節で光としての御子イエシュアを呼び出したのは、
私たちのために贖いの血を一滴残らず注ぐ出来事を秘めていますが、
今日扱う 2 章 10 節は、血を必要としないミングリングの状態です。

シャーカー
הַקָּוֶה 潤す

エデンの園での人は、「 いのちの木 」に象徴される「 神のみことば 」を食べ、「 いのちの水の川 」を飲んで渴きを潤すとして

います。6 節では「 大地を潤す ^{シャーカー}הַקָּוֶה 」とあります。

シャーカー
הַקָּוֶה は聖霊を表現しています。

ヤーツアー

𐤀𐤃𐤁𐤀

湧き出る（新改訳 2017） 流れ出る（新共同訳）

黙示録 22 章 1 節の本体「新しいエルサレム」では、

ヤーツアー

「神と子羊の御座から流れ出る𐤀𐤃𐤁𐤀いのちの水の川」とあります。

黙示録 22 章 1-2 節

1 御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川（単数）を

私に見せた。川は神と子羊の御座から出て

ヤーツアー
𐤀𐤃𐤁𐤀

2 都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、

十二の実をならせるいのちの木（単数）があつて、

毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒した。

ここで「癒す」とは、病気を癒すことではなく、

健やかな状態にする「木」を示しています。

ヤーツアー


新約聖書の「湧き出る𐤀𐤃𐤁𐤀」

● サマリアの女の話

イエシュアがサマリアの女に語りました。

ヨハネの福音書 4 章 14 節

・・わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。 わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいの

ちへの水が湧き出ます ^{ヤーツアー} .


● 仮庵の祭りの八日目

ヨハネの福音書 7 章 37 – 38 節

37 ・・「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。

38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり（イザヤ 44 : 3

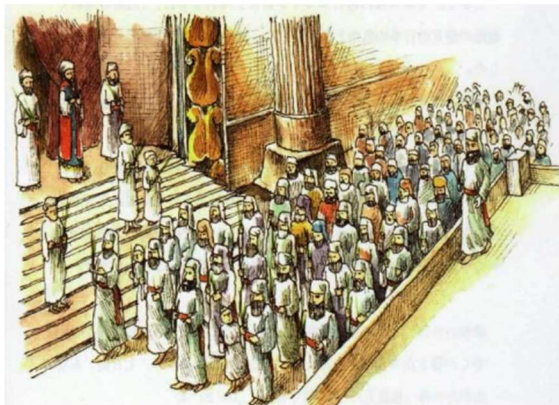
エゼキエル 47 : 1 – 12)、その人の心の奥底から（霊から）、

生ける水の川が流れ出る ^{ヤーツアー}  ようになります。

祭りの最終である八日目に、イエシュアは人々に大声で語りました。

「 仮庵の祭り 」は、シロアムの池から神殿まで水を運ぶ

「 水の祭り 」でもあります。



祭りという儀式で満たされないことをイエシュアはご存知でした。

この尽きる事のない「いのちの水」の流れは「聖霊」を象徴しています。

ヨハネの福音書 7 章 39 節

イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったため、御霊はまだ下っていなかったのである。

新改訳 2017 では「まだ下ってはいなかった」と訳しています。

「聖霊が下っていなかった」とは、聖霊はペンテコステで下ると考慮した訳し方をしているのでしょうか。しかし、

原文では「 なかった 」になっています。

人の霊の中から湧き出て来る聖霊の水がまだなかった、
聖霊はまだなかった、と聖書は記しています。 それでも、
新約聖書を読むと、マリヤも、エリサベツも、ザカリヤも、ヨハネも
聖霊に満たされています。

イエシュアの誕生 40 日目に神に献げるため、エルサレムにいた時、
聖霊がシメオンの上におられた、聖霊によって告げられていた、
聖霊に導かれてとあります。

これは、これから起るデモンストレーションです。

シメオンの時代、イエシュアを信じる者に、聖書が言っている通り
心の奥底（霊の中）から生ける水が川のように流れ出ることが
包括的にはなく、個別的に起こっているのです。

イエシュアが栄光を受けられる、つまり死からよみがえって
「いのちを与える霊」となって人の霊を再生して内住する前に
「 聖霊 」という語彙はありますが、まだ個別的で特別なのです。
シメオンは聖霊によって幼子を腕に抱きます。 彼はイスラエルの
慰められることを（救われることを）待ち望んでいた人なのです。

聖霊に支配されたシメオンが幼子を抱いた時、
幼子の中に、神様がなされる救いの全貌を見たのです。
イスラエルのみならず、イスラエルを通して祝福される全人類、
万民に備えられた救い、異邦人とイスラエルの救い、
イスラエルと教会の救いをも見たのです。
それは、メシア王国の祝福を見たということです。
神の究極のヴィジョンを見たので、安心して眠れる（死ぬる）と
言うのです。 聖霊に満たされると、シメオンのように目が開かれる
でしょう。 神のご計画の全体像を見たのです。
私たちが生きているこの世の話ではなく、
神が究極的に何をされるのかを幼子を通して一瞬にして見たのです。
シメオンが見たことを告げると、使命は終わるのです。
これが聖霊を受ける際の唯一の働きです。
シメオンは、使徒でも特別な人でもなく、普通の人です。
普通の人でも聖霊に満たされると神様の御計画を見る事が出来るよ
うになるのです。
イエシュアが十字架にかかり、三日目によみがえって「いのちを与え

る霊」となられて私たちの霊の中に住んだとき、

まず「 御国の福音 」を理解します。

イエシュアは、40 日間、毎日毎日息を吹きかけて三年半語り続けた

「 御国の福音 」をもう一度語りました。 それで

使徒たちは完全に悟ったのです。

メシア王国のヴィジョンを弟子たちはきちんと受け取ったでしょう。

40 日間、息を吹きかけて聖霊を受けさせて、

50 日目に、世に向けてイエシュアを証しする力が上から注がれました。

この 40 日間で弟子たちはイエシュアの語る「 御国の福音 」

を理解して、自分のものにしました。これが内なる聖霊の力です。

弟子たちは、三年半イエシュアと寝食を共にしていましたが、

「 御国の福音 」が理解できなかったのです。

いつもちぐはぐな対応しかできないまま、最後はイエシュアから離

れようとしてしました。そのような者が「 御国の福音 」を知るのです。

ユダヤ教の権威ある祭司たちには、まったく理解できないのですが、

無学な漁師であり、小さな者たちが神の「 御国の福音 」を

理解できるのは、聖霊の働きです。 凄いではありませんか。

聖霊が与えられると、力が出て神の奉仕ができる！！というのではなく、まず神の御計画が理解できる、悟る力が与えられるのです。

聖書学者でもないのに・・・。　そこが凄いところです。

私たちが眠る時「 御国の福音 」を知らずに死んでもいいのですか。

私はどこに行くのだろう？と 50 年信仰生活をして、死んだ後どうなるのだろう、なんとなくイエシュアのもとに行くのだなあという感じでいいのでしょうか。

旧約聖書で何度も語られている内容を浮かべながら眠りにつくのは
幸いな人だと思いませんか。　眠りにつくときに安心して

眠りから覚めたら新しいからだに造り変えられてイエシュアと空中で会うのだと知って眠りにつくのと、どうなるかわからないけれど
なんとなく天国に行くような感じかなあと思って過ごすのとでは
かなり違いがあるのではないのでしょうか。

よくわからないけれど、

一応天国へ行ったことにしましょうという感じじゃないですか。

エデンの園は、聖霊がいつもみことばとともに

ミングリングした状態で流れていたということです。

エゼキエル 47 章

(メシア王国のヴィジョンが書かれている章)

ここによれば、メシア王国にも、エルサレムに主の神殿が建ちます。

その聖所の敷居から「いのちの水の川」が流れ出て

その川の流れゆくところ、すべてが生きると描かれて預言されてい

ます。御座から流れ出る「いのちの水」によって

すべてのものが生きるのです。雑魚一匹、住めないような

死海に多くの魚が住むというのは、

魚を象徴するすべての異邦人も含めて生かされるヴィジョンです。

「いのちの水の川」は絶えず至聖所から「流れ出る、湧き出る」

ということです。「いのち」は流れるのです。流れが止まれ

ば「いのち」がなくなります。絶えずいのちは流れます。

一つの聖書解釈でとどまるのではなく、流れ続けていきますから

さらに開かれ、深まっていくのが「いのち」の特徴です。

神様との交わりも同様かと思えます。

創世記 1 章の学びもそうですが、それぞれの語彙は、字義通りでは

なく、メタファー(隠喩)であったり、象徴として使われたりします。

一つの川 ^{ナーハール} נַחַל

エデンの園の源泉となる川 ^{ナーハール} נַחַל は単数です。

この源泉から四つの川が流れて末広がり拡大していきます。

聖書の「四」は「すべて 全地を象徴する」数です。

祝福の源泉である神のいのちが、全地に流れ出るイメージです。

また逆に、神は全世界から離散した全イスラエルを隅々から集めて

聖なる都エルサレムに連れ戻されると預言されています。

エゼキエル書 37 章 21 節

彼らに告げよ。『【神】』である主はこう言われる。見よ。わたしはイスラエルの子らを、彼らが行っていた国々(世界中に離散しているイスラエルの民)の間から取り、四方から集めて彼らの地(エルサレムを中心にしたイスラエルの地)に導いて行く。

37 章は、枯れた骨が生き返る出来事の話です。

ローマ時代に全世界に離散した民を集めて彼らが以前いた

ところに導いていく預言です。そのような民は他にはありません。

イスラエルは特別だという話が隠されているのです。

「 四 」という全が「 一 」につながるお話です。

「 一 」のイスラエルが世界に散らされて、彼らを通して全世界が祝福されるシメオンが見たヴィジョンがここでも描かれています。

ラーシーム
源流 **רְאשֵׁי**

エデンから湧き出る一つの川 **נְהַר** は単数形です。

נְהַר は四つの川に分かれます。 四つの川の源流 **רְאשֵׁי** は複数形です。 どう考えたらよいでしょうか。

でも驚かないでください。 創世記 1 章 1 節、最初に登場する神

אֱלֹהִים は複数形です。 いのち **חַיִּים** も複数形です。

源流 **רְאשֵׁי** の語源は **רֶאשׁ** 「かしら・頭」です。

キリストを表しているともいえます。

キリストは「 いのちの源流 喜びの源流 あらゆる祝福の源流 」

と言えます。 またキリストは、御父と御子と霊が一つになっています。 複数の「三」なる神であって「一」です。 「三」だけど「一」。 とても不思議な存在です。 歴史の流れはキリストに支配されているのです。

コロサイ人への手紙 3 章 11 節

・ ・ キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。

第一の川

創世記 2 章 11 - 14 節

- 11 第一のものの名はピジョン。それはハビラの全土を巡って流れていた。そこには金があった。
- 12 その地の金は良質で、そこにはベドラハとショハム石もあった。
- 13 第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れていた。
- 14 第三の川の名はティグリス。それはアシュルの東を流れていた。
- 第四の川、それはユーフラテスである。

第一の川と第二の川と第三の川と第四の川がありますが、

第一の川は 1st river ではありません。

エハード ハーエハード
序数ではなくて「一つ \aleph_1 」に冠詞がついた \aleph_1 です。

創世記 1 章の第一日も 1st day ではなく

エハード ヨーム
「一日 \aleph_1 יום」です。

エハード ヨーム
1 章では「一日 \aleph_1 יום」に神の御計画のすべてが各日

のフォルダとして括られていました。神のご計画やリズム、

光と闇を分け、闇から光へというリズムで神の御計画は進む・・・。

別の言い方をすれば「死から復活」のテーマが示されてきました。

そのような一つのフォルダの中に、第二日 第三日 第四日

第五 第六が入っていると考えることができました。

この川の場合も、第一の川の中に、第二の川 第三の川 第四の川

が括られていると見ることができます。

ハーエハード
第一の川は「一つの川 \aleph_1 」として、

包括的事柄を含ませて書かれているのです。

黙示録 22 章では「無代価で流れるいのちの川」が御座から流れ

ていることだけに限られています、

第一の川から第四の川の中では、第一の川が特に際立っていて、



ピーション

ギーホーン

ヒデケル

ヘラート

ハッソーヴェーヴ

巡って **חַבְוֹן** 流れていた

11 節と 13 節 「 巡って流れていた 」

この辺りから預言的な事柄が書かれています。預言的とは

イエシュアが来て明かされる事柄です。 それまでは、

預言的であり、奥義的であり、隠されています。

イエシュアが来ると、なるほどということになります。ここで、

11 節 13 節の 全土を「巡って流れていた」という表現と

14 節の ・ ・ 「流れていた」という二つの表現があります

似ていますよね。しかし、語彙が違います。

ハッソーヴェーヴ

● 一つ目のハビラの全土を「巡って流れていた **הַסּוּבַב**」は、
冠詞付の分詞です。(原文は「巡っている」つまり「巡って流れてい
る川」という文章です。)

ハッソーヴェーヴ

● 第二の川(13 節)もクシュの全土を巡って流れていた **הַסּוּבַב**
とあり、ここも第一の川と同じです。クシュはエチオピアです。
エチオピアの宦官がわざわざエルサレムに礼拝に来ています。

(使徒の働き 8 : 26-39)

その宦官にピリポが洗礼を授けて救っている記事がありますね。

サーヴァヴ

סָבַב 巡る

サーヴァヴ

「 イエシュアがガリラヤの全域を巡って **סָבַב** 」

イエシュアは宗教的な中心であるエルサレムから出発したのではなく、ガリラヤの全域といっても、異邦人化されたゼブルンとナフタリの地から始めています。そしてガリラヤ全土をくまなく回り「御国の福音」を宣べ伝えていきます。

イエシュアが巡った^{サーヴァヴ}בְּרַבִּי^{ピーション}פִּישׁוֹןが最初の流れ^{ピーション}פִּישׁוֹןピションです。

ピションが巡る^{ハヴィーラー}הַיְלָהַבִּירָהハビラの地に良質の金や宝石があったとあります。ここにどのような意味があるのでしょうか。

良質の金とは、純金です。

宝石は^{ベドラーハ}בְּדוֹרָהと^{ショーハム}שְׁהַמַּיִםショハム石です。

ここに神の御計画があります。ガリラヤ地方の人々をこのような宝石に造り変えるということです。

^{ピーション}פִּישׁוֹןピションの語源は恐らく^{プーシュ}פּוֹשֵׁת「増え広がっていく」ではないかと思われます。

流れていた^{ハホーレーフ}הַחֹלֶף

14 節「 アシエルの東を流れていた 」

冠詞付の分詞になっています。

ハーラフ
הִלְכָה

川が歩くのです。

「東を流れていた ^{ハホーレーフ}הִלְכָה

足の赴くまま歩いて流れているのではなく、

神のご計画とみこころに沿って流れていることを表しています。

自由に流れているように見えても、

神のご計画とみこころに沿って流れています。

神のみこころに沿った流れを「歩く ^{ハーラフ}הִלְכָה

イエシュアもただ歩いたのではなく、御父のご計画とみこころに

沿って歩まれ、十字架にさえも従いました。

次第にそうなったのではなく、初めから定められたみこころに沿っ

てイエシュアも ^{ハーラフ}הִלְכָה

ハーラフ

הלך

「神の御前における人のすべての行為を統括する用語」

レハー レフ
הלך-הלך

「わたしの示す地に行きなさい」（創 12 : 1）と言われたアブラムも歩いていけと命令を受けました。

その後アブラムは、飢饉のためエジプトに移動しますが、戻ってきます。 なかなか子どもが生まれないので、妻のサラが自分の女奴隷を差し出して子どもを得ます。 この出来事の後、神は現れなくなりました。 13 年ほどしてようやく示されたことばは

ハーラフ

「あなたはわたしの前に歩み ^{レハー}הלך、全き者であれ」（創 17 : 1）で

す。 しかもヒットパエル態（能動強調）で、自ら主体的に主の前を歩め、という自分の思うままに歩いたり、自分の観念で歩くのではなく、わたしのみこころに添って歩むようにと語られました。実は最後の第四の川の流れから、イスラエルであるアブラムが召し出されているのです。 それがユーフラテス川です。

このように川の流に例えながら、神のご計画が表されています。

ギーホン

第二の川  ギホンは、「溢れ出る」という意味です。

「第二の川は溢れ出る」とは、

神に敵対しながら勢いを持って流れていく流れを表しています。

ここは、クシュだけではなく、ニムロデが産まれて来る流れで、

神に敵対する流れも神の御計画の中に含まれています。

神はすべて織り込み済みで計画を立てておられるのです。

神様に従う人達だけではなく、ギホンの流れは神に敵対する流れ。

ここには、エチオピアの宦官のような人たちも入っています。

こういったことを調べていくと面白いかもしれません。

第一の川は、神のご計画の中でも中心的な位置づけです。

第一の川の流は、神のご計画の主演となる

御民イスラエルに与えられる祝福の流を表しています。

この祝福の流は、神聖を象徴する金に例えられています。

第一の流として「一つの川」の流には金があり、

神の大切な流を表しています。と同時に、

神の民イスラエルは宝石に、そしてエックレーシア（教会）は
真珠にたとえられています。

創世記 2 章 12 節では、真珠を ^{ペドラーハ}  ペドラーハとしています。

本体である「新しいエルサレム」では、真珠と書かれています。

^{ペドラーハ}
 ペドラーハ について

民数記 11 章 7 節

マナはコエンドロの種のように、一見、ペドラーハのようであった。

出エジプト記 16 章 31 節

イスラエルの家は、それをマナと名づけた。それはコエンドロの種のように、白く、その味は蜜を入れた薄焼きパンのようであった。

このマナの白さから、ペドラーハが真珠にたとえられているのかもしれない。

^{ショーハム}
 ショハム石

12 の宝石でイスラエルの民が表されています。

その中に^{シヨ-ハム} **רְהוֹב** シヨハム石：縞めのうがあります。

^{シヨ-ハム} **רְהוֹב** は宝石を代表しているようです。

イスラエルの 12 部族で^{シヨ-ハム} **רְהוֹב** の宝石を当てはめらるのが

^{ア-シエ-ル} **אֲשֵׁרָה** アシエル族です。そして、

宝石は、初めから宝石ではありません。

普通の石が、高圧力や高熱で造り変えられるものです。

イスラエルの民やまた教会も、そのように一つの石が神の恵みによって造り変えられて、

イスラエルは宝石に、

教会は真珠に変えられていきます。 ですから

黙示録 21~22 章では、イスラエルは 12 の宝石で、

教会は 12 の真珠となつて、それぞれの門に置かれているのです。

最初と最後の記事、創世記と黙示録は、つながっているのです。

イエシュアも天の御国のたとえ話をしています。

マタイの福音書 13 章 44 – 46 節

44 天の御国は畑に隠された宝のようなものです。その宝を見つけた人はそれをそのまま隠しておきます。そして喜びのあまり持っているものすべてを売り払い、その畑を買います。

45 天の御国は、良い真珠を探している商人のようなものです。

46 高価な真珠を一つみつけた商人は、行って持っていた物すべてを売り払い、それを買います。

共通しているのは、宝を見出した人も、真珠を見つけた商人も、持っている物すべてを売り払って買う人も同じ人です。

それは、私たちではありません。

そう考えていたらこのたとえ話は天の御国の話ではなくなります。

さて、宝石を見つけた人と真珠を見つけた人の話は、

少し異なる点があります。

宝を見つけた人は、その宝をそのまま隠しておきます。

真珠は隠さずに買います。

これは何を意味しているのでしょうか。

大祭司のエポデにある宝石はイスラエルを表していて、
畑に隠されている宝もイスラエルを指しています。
イスラエルは神に選ばれ見出だされましたが、
キリストのものになる前に、もう一度畑の中に隠されます。
神が隠す、キリストが隠すと言ってもいいでしょう。
それは彼らの心が頑なで、盲目にされることを表しています。
しかしここに、神の深いみこころがあります。
そのみこころとは、福音が異邦人にもおよぶためです。
しかし、神にとってイスラエルは決して消える事のない神の宝です。
異邦人にも福音の祝福がおよぶために、最初に見出だされた宝を
隠しておくのです。 では、いつ見つけるのかというと、
長い間の教会の時代が終わって、キリストが戻って来る直前に
見出だされるのです。 これが神の御計画です。
旧約で、イスラエルを「 わたしの宝 」と語られる箇所があります。

出エジプト記 19 章 5 節

今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を

守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあつて、**わたしの宝**の民となる、全世界はわたしのものであるから。

申命記 14 章 2 節

あなたは、あなたの神、【主】の聖なる民だからである。【主】は地の面のあらゆる民の中からあなたを選んで、**ご自分の宝**の民とされた。

申命記 26 章 18 節

・・・【主】は、あなたに約束したとおり、あなたが主のすべての命令を守り**主の宝**の民となること、

詩篇 135 篇 4 節

【主】はヤコブをご自分のために選び イスラエルを**ご自分の宝**として選ばれた

マラキ 3 章 17 節

「彼らは、わたしのものとなる。一万軍の主は言われる—
わたしが事を行う日（メシア王国）に、**わたしの宝**となる。
人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。

エジプトから救い出して（出エジプト記 19 章～）神のもとに連れて来た時から「 あなたはわたしの宝の民 」とイスラエルの民に言い続けていくのです。

最後の時、わたしが事を行う日（つまりメシア王国の時）に、

「 わたしの宝 」となると言っています。

その時、イスラエルは一気に「 宝の民 」になります。

恵みと嘆願の霊（ゼカリヤ 12：10）を与えられて、



イエシュアがメシアであると知り、神が定めた「 宝の民 」となっていくます。 大祭司が、胸当てに 12 の石を並べたエポデです。

出エジプト記 39 章 10—14 節

10 その中に四列の宝石をはめ込んだ。第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。

11 第二列はトルコ石、サファイア、ダイヤモンド。

12 第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶。

13 第四列は緑柱石、縞めのう、碧玉。これらが金縁の細工の中にはめ込まれた。

14 これらの宝石はイスラエルの息子たちの名にちなむもので、彼らの名にしたがい十二個であった。それらは印章のように、それぞれに名が彫られ、十二部族を表した。

石に名が直接彫り込まれています。

黙示録 21 – 22 章では、

十二の石が新しいエルサレムの土台石となります。

宝は隠されたものですが、真珠は隠されることはありません。

高価な真珠は、ユダヤ人と異邦人からなるエックレーシアです。

イエシュアはこれらを得るために、

いのちであるご自身の血をすべて売り払って貧しくなられました。

これは十字架で流された血潮で、エックレーシアという真珠を買い取ったことを表しています。 真珠はキリストの花嫁なのです。

Ⅱコリント人への手紙 8 章 9 節

あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。

すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。

黙示録 21 章 18－21 節

- 18 都の城壁は碧玉で造られ、都は透き通ったガラスに似た純金でできていた。
- 19 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイア、第三はめのう、第四はエメラルド
- 20 第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九はトパーズ、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。
- 21 十二の門は十二の真珠であり、どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは純金で、透明のようなガラスのようであった。

神の都「新しいエルサレム」にある門は「真珠」、都の大通りは「純

金)、土台は「宝石」でできていて、ベドラハ ショハム石（縞めのう）が代表しています。創世記 2 章に登場したものが黙示録 21 章でも出ています。セットで存在しているんですね。

今日のまとめ

神と人が住む「新しいエルサレム」は歴史の中で展開する「エデンの園」「モーセの幕屋」「神殿」「イエシュア」「教会」「メシア王国」の最終的な姿ではなく、元からある本体で、初めから神にあって完成されているのです。それが歴史の中でどのように展開するのかを表しているのが聖書です。

イザヤ書 46 章 10 節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』という。

神の主権において、歴史は閉じられ、神のなさりたいことは

すべて成し遂げられる。

黙示録では 144000 (= $12 \times 12 \times 1000$) 人という数、あるいは
12000 (12×1000) スタディオンの数に御思いが潜んでいます。

12 は    「望む 好む 願う」のゲマトリアです。

12×1000 (ヘブル語の最高単位) で、神の大いに喜ばれる最高単位
となります。さらに、 $12 \times 12 \times 1000 = 144000$ で、
神の究極的な喜びを表す数となります。

しかも 144000 が二回出て来ます。

それは 144000 人のイスラエルの残り者 (黙示録 7 章)、

144000 人のエックレーシア (黙示録 14 章) を象徴する数です。

144000 人は、字義通りの数ではなく、神のみこころの象徴する数
です。神様の望むこと、神の究極的な喜びを表す数なのです。

創世記 2 章と黙示録を照らし合わせながら、神が終わりに

どのようなことをされるかを

繋げながら学ぶことが出来たのではないのでしょうか。

次回は「善悪の知識の木を食べると死ぬよ」という話です。

川の流りにたとえながら、聖霊の豊かな流れと、反発する流れがいくつか出て来る話になります。

私たちは、どんなに頑張っても真珠にはなれません。しかしながら、真珠の要素を持つ信仰によって生きているのです。

ヘブル的な視点が全部わからなくてもいいです。

携拳されたときには全部わかりますから・・・。

シメオンは、幼子を通して救いの全貌を見ました。

細かいデテイルは分からなくても、全貌が見えたのです。

私たちの相応しくない部分は主によって覆われるので大丈夫です。

今は、イエシュアが語る御国の福音がぼんやりとしか見えません。

それは、私たちが何かを証ししても描けません。

なぜなら、御国を証しすることができないからです。

私たちの体験で、救いの恵みは証しできますが、

神様の御計画の全体像は証しできません。

説明しなければいけないのです。説明も霊的なので、

同じ霊でなければ理解できません。ここがもどかしさなのです。

わかってもらいたいと思っても・・・、霊によって語っても・・・、

必ずしも理解できるというわけではありませんから・・・。

イエシュアがそうでしょ。

「わたしの語ることは霊であり、いのちだ」と言いました。

いのちであり、霊のことばは「御国の福音」です。

残念ながら、多くの教会がきちんと語っていません。

自分たちの証しは理解できますが、

「御国の福音」は霊的なので理解できないのです。けれど、

神様こうしてくださったよ、という話には耳を傾けますが、

神様のご計画よりも、今の私が幸せになることが大切なのです。

そのようになると、神様が一番教えたいことが受け取れ難いのです。

熱心な信仰生活のようで、一番大切な福音を聞いていないのです。

人間の経験するレベルで収まっていると、

そのような福音に成り代わっていきます。

いつからかそうなったのかわかりません。残念ながら、

初代教会が伝えた福音ではありません。

今日の学びとして、

川は、神のご計画の流れを表しています。

神の御計画は、一つの川でつながっています。

金があり、宝石があり真珠があるのです。

その中に敵対する流れもあります。

すべてシナリオライターである神のご計画です。

そういった流れを造りながら、ご計画が展開されていくのです。

神に敵対することを想定して、流れは造られているのでしょう。

すでに、蛇も存在しているのですから。

蛇もやがて人間に敵対すると分かっているながらエデンに置かれてい

るのです。 神のドラマ、神の御計画に沿ってすべてが敷設される、

神の御膳立てされた展開を、学んでいるという感じです。



2023. 8.27

アシュレークラス月曜日

「創世記 2 章 10 – 14 節」

空知太栄光キリスト教会

銘形秀則